

## 1. 雑感

九州工学教育協会副会長 新日本製鉄(株)八幡製鉄所長 萬谷 興亞

「中国の古いことわざ」に、来年の繁栄を願うならみんなで稲を育てなさい、10年後の繁栄を願うならみんなで人を育てなさい、とある。一過性でない、永続性のある繁栄は次々と新しい改善、新しい事業を産み続けたいといけない、それを産み続けられる力は唯一「ひと」。

どうしたら、その「ひと」を育てられるか。学校教育の大切さ、小学校を含めた日本の教育の再構築、いや、もっと遡れば家庭教育がなっていない。等と教育に原因も結果も求める議論がなされている。教育は大切、これは論を待たない。しかし、教育はあくまでも手助けであって、もっとも大切なことは、一人一人が強い望み、何になりたい、との強い目的、大きな使命感を持つことである。

どうすればそれを持たせることが出来るのか、この点について真剣に議論がなされないまま、大学改革とか教科書のあり方、とか、形の議論が先行していることに危惧の念を抱いている。

日本全体として、この先どんな国になりたいのか、どんな特色を持った国になって生きていくのか、明確な指針を政府が示していないのが原因である、と、責任をそちらに持っていく人も多いが、それも当たっていないと思う。今の政府を造ったのは国民である。

私は、国民一人一人が、自主自立、自己責任で、自分で考え、自分の意見を持ち、周りに発信し、議論をし、選挙を通じて意見を実現していく、そのことの繰り返しで、「この国のかたち」を造っていく以外に解決策はないと思っている。その一歩を踏み出すのは、私を含めた大人の責任である。

歴史は多くのことを教えてくれる。私は、二つの歴史観をもっている。

1) 日本史も、世界史も、大きな流れは、幸せ層に属する人の割合が増えるベクトルをたどっている。明日の食事の心配がいらぬ、最低限の医療が受けられる、を幸せ判定とすると。平安時代(5%)、鎌倉時代(10%)、江戸時代(30%)、明治時代(60%)、現代(100%)。しかし、世界60億人はまだ50%程度しか幸せ層に属していない。江戸から明治への移行期。過去、一つの時代を超えるときには戦争があった、そのエネルギーが必要であった。結果、幸せ層の幸せ度は低下した。

21世紀、このベクトルに沿った動きは避け得ない。幸せ層に属する日本は如何なるのか、戦争に変わるエネルギーは何か？

2) 時代を乗り越えるたびに、生活単位、経済単位、思考単位が大きくなっている。日本の閉息感の大きな原因の一つは、単位の組み替えをしていない事にある。市、県の単位から脱却して、最低限九州道を単位にすることが急がれる。しかし、単位拡大もまた、過去には戦争エネルギーが必要であった。

せめて、2)の流れは、我々の力で、急いで実現する事を目指したいと思っている。

## 2. 九工教の動き(平成11年7月～11月)と予定

平成11年7月23日(金)(12:00～13:30) 第1回理事会(於 熊本テクノポリスセンター)

平成10年度決算報告、平成11年度役員、事業計画、予算案が承認された。

当日は、予定通りバスで出発したが、大型車輛の事故のため高速道路が封鎖され、遠回りして、大刀洗を經由して鳥栖、熊本へと急いだが、予定が大幅に狂ってしまい熊本地区の皆さんに大変ご迷惑をかけました。そして見学を予定して頂いた「グランメッセ熊本」の見学を断念せざるを得ませんでした。理事会の後、熊本テクノポリス内の電子応用機械技術研究所、リサーチパーク、熊本県立技術短期大学を見学して、高速道路を經由して、予定時間より少し遅れて帰着した。

今回の理事会、見学会につきましては、熊本大学の川路茂保教授に大変お世話になりました。

ないかという教官側からの指摘があり、高専教育に対する学校側の危機感を受けたものである。このように最近の新入生の状況を考えたとき、高専における「特別活動」の在り方が、改めて再認識されるべきなのに、高専は、高等教育機関であるという意識もあり、「特別活動」そのものの進め方や取り組みにおいて、各高専間においてかなりの認識の違いが指摘されるようになった。また特別活動の大部分を担う担任教官の、この面における「知識・経験」の点でも問題はないのかということである。このような現実を踏まえて、まずは各校の取り組みの現状を見直し、改めて高専としての「特別活動の在り方」を検討して、特別活動に対する共通認識を再構築しようと言うのが今回の研究集会の主旨であった。

### 3.) 講演概要

特別講演者として、特別活動に関する多くの研究及び実践経験をお持ちの鹿児島県総合教育センター研究主事森山武志先生が、小学校、中学校、高等学校における特別活動の基本理念(望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての在り方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。)について話された。そして教官が、如何にして学生を指導していくべきか具体的に指導された。

次に、鹿児島高専の教官による実践例が報告された。優れた指導技術を持つ両氏の報告は他高専の教官に1つのヒントを与えたようである。

### 4.) 討議概要

二日にわたる討議の結果、次のようなことが再認識され、また問題点として挙げられた。

1. 特別活動は設置基準にあるとおり、各高専において細部については各高専の独自性を出しながら、90単位時間以上確実に実施する。
2. 高学年における特別活動の扱いについては、扱いは各校で独自に決めながら実施していく。
3. 新任教官や若手の教官に対する研修や指導助言が必要であり、教務主事や教務委員会、学科主任等を中心に学校を挙げた取り組みが必要である。
4. クラブルームにおける指導を基本としながら、体育祭、高専祭、ロボットコンテスト、プログラムコンテスト、等の活動も「技術者としてどう生きるべきか」という観点で「特別活動」として積極的に指導・助言を行うことも大事である。

以上、参加した教官の熱心で活発な討議と、両校長の適切な助言により有意義な研究集が行われた。

## 5. 日工教研究講演委員会報告

福岡工業大学情報工学部情報システム工学科 中川 貴

平成9年度から九州地区選出委員として日工教研究講演委員会委員をしております。

この委員会は毎年夏に開催されている工学・工業教育研究講演会(定款でいう工学教育研究集会)の開催に必要な業務を行う委員会です。年間5~6回、東京都港区、三田アルスビルにある日工教事務所で委員会が開催されます。

地区選出委員は研究講演会の開催地区になるとき以外、あまり仕事がありません。去年は福岡リーセントホテルでの研究講演会の準備で多忙でしたが、現在は楽らせていただいております。来年の工学・工業教育研究講演会は東海地区で開催されることになっています。九州地区の会員の皆様にはまた積極的に応募くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

さて、委員会の年度は9月から8月までで、研究講演会が終わったあと、その反省と次回の準備のために年度第1回の委員会が開かれます。今回は去る9月22日の第1回委員会で印象に残った話題を紹介します。

〔その1〕

「今年の神戸の研究講演会の発表件数(プログラム上で84件)は去年の福岡の発表件数(同じく142件)より大幅に少なかったですね。」

「前は発表件数を増やすため、当時の事務局長の発案で学校や企業への講演募集ルートを変更し、各地区協会からその地区の学校や企業に働きかけるようにしました。その結果、発表件数が当初の見込みを大幅に超え、福岡では会場数を増やし、しかも講演時間を延長して何とか